

# 世界一のパンと結核療養所

～小布施岩崎とチェルシーバンズ～



2年2組 29番 西田 圭汰

## はじめに

最初に僕がこの研究を始めたきっかけを説明します。

まず、僕は今年の春休みに母が何の気なしに長野県の小布施町という町に行こうという事を言って、1泊2日で旅行に行きました。そこで泊まった旅館でたまたま見た長野県のテレビでパンにクリームが挟まれた、長野県内では有名な牛乳パンというものが紹介されていました。そこで小布施町にあるパン屋を探し、1番近いところにある小布施岩崎に行くことになりました。そこで店頭にいた岩崎しのぶさんが気さくに話しかけてきて、僕たちが東京から来たという事で興味を持たれました。そこで、今は亡き岩崎しのぶさんの夫、小弥太さんという人がキリスト教系のカナダ聖公会という組織の結核療養所の看護師長からチェルシーバンズというパンを伝えられたという話を聞きました。そこには『世界一のパン』という絵本がありました。それはその出来事を絵本にしたもので、母も僕も興味があり、絵本とチェルシーバンズを買って東京に帰りました。そして帰宅してこの話題を研究することになりました。

今回は岩崎しのぶさんと牧師の金善姫さんにご一緒してお話を伺いました。そして買って帰ったチェルシーバンズがとても美味しかったので自分でもチェルシーバンズを作ってみることにしました。



## 岩崎しのぶさんにお話を聞く

春休み自宅に帰ったあと何度か手紙でやり取りをして、夏休みに入った8月17日小布施岩崎の岩崎しのぶさんに再会しました。

当日は小布施駅まで車で迎えに来てくれた岩崎さんはもう84歳になるというのにとても運転がお上手でした。岩崎さんはもともと東京の方で小布施に嫁いで来られたそうです。お父様の糟谷伊佐久さんが東京の聖路加病院のお医者さんでした。その聖路加病院は日本聖公会(キリスト教の一派)が運営している病院です。

そしてその聖公会のカナダ支部が戦前日本に蔓延していた結核の患者のための療養所を長野県小布施町に建設しました。その為、岩崎さんのお父様は小布施に赴任され、大変小布施を気に入られたという事で娘を小布施の人と結婚させようと思ったとのことで小布施岩崎の岩崎小弥太さんに嫁がせたということです。

岩崎しのぶさんと



小布施岩崎にて



## 小布施町について

栗と葛飾北斎が有名な町小布施。江戸幕府の天領として上質な大粒の栗を将軍に献上していた栗の特産地であり、富嶽三十六景などで有名な葛飾北斎が身を寄せ、たくさんの肉筆画を残した地としても観光客に人気の高い町です。

また、住民一体となって「花のまちづくり」に取り組みながら現在はイギリス発祥の「オープンガーデン」も運営されています。

さらに小布施町は長野県内で最も面積の小さい町という事ですが、美しい街並み、のどかな田舎風景など様々な景色を凝縮したような素晴らしい町です。



## 小布施岩崎について

現在の小布施町の中心から少し離れた所に、小布施岩崎があります。その小布施岩崎は1862年創業した当時は栗菓子を作っていた和菓子店でした。その4代目となった岩崎小弥太さんは父に言われ「これからはパンの需要が増えるだろう。パン作りの修業をしたらどうだ。」といわれたそうです。そこで小弥太さんは10代にして長野県内のとあるパン屋に弟子入りしたのです。そして、3年修業を積み基本的な技術を身につけて小布施に戻りました。そしてまだ小布施にパン屋がない時代にあんパンやクリームパン、ジャムパンを作り始めました。それが現在の小布施岩崎の原点でした。



## 新生療養所の誕生

現在の新生病院の前身、新生療養所は 1934 年にカナダ聖公会の手によって開設されました。カナダ聖公会は英国国協を母体とするキリスト教の一派です。療養所が開設された頃の日本は大恐慌でした。そんな中町には失業者が溢れていた時代でした。そんな時代に亡国病ともいわれた結核が大流行しました。その結核は当時特効薬がなく、空気の綺麗な自然豊かな環境で人間の自然治癒能力に頼ることしかできませんでした。そんな中カナダ聖公会の療養所の候補地探しが始まりました。長野県在住のウォーラー司祭が 34 番目の候補地として、のどかな自然に恵まれた小布施を選びました。そこに初代院長になるスタート博士とその部下たちが来日しました。自然がいっぱいの田舎に巨大な洋館が建設されるということで見物人は住人ほぼ全員だったそうです。

それが小布施の昭和の幕開けであり、新生療養所が誕生したときでした。



**バルコニーに患者を出して自然の空気をたくさん  
吸わせる治療法**



## 世界一のパン

故岩崎小弥太さん（岩崎しのぶさんの夫）は近くにできた新生療養所にカナダ人がいたため給食パンを毎日のように届けるようになりました。その時に看護師長を務めていたのがミス・パウルでした。しかし、小弥太さんから見てミス・パウルは「怖い」「厳しい」という印象がありつつもただパンを届けるためだけだったため特に親しく喋るような関係ではなかったそうです。

そんなある日に小弥太さんは職員に「ミス・パウルが呼んでいますよ」と言われました。そして、おびえながらナースステーションに向かいました。そこでミス・パウルに「私の家に来なさい」と言われました。そして小弥太さんは療養所と隣接した宿舎を訪ねました。そこでミス・パウルはおぼつかない命令口調混じりの日本語で皿の上に置いてあるパンを「食べなさい」と勧めました。そして小弥太さんはパンを口にしました。それは小弥太さんにとって衝撃的な味でした。口に広がるシナモンやレーズンやバター砂糖、クルミの食感。そこで小弥太さんは世界一のパン-チェルシーバンズを作りたくなりました。そして、ミス・パウルに教えてもらったレシピ

を入念にメモしていきました。そのメモ通りに初めてパンを作りました。しかしそれはあの時の味とは異なり、ぼそっとした硬いパンでした。その原因は日本の小麦粉の質の悪さでした。それからというもの小弥太さんは夢のパンの味を再現するために国産の上質な粉にしたり、カナダ産の粉にできるだけ近づけようと、さまざまに条件を変えながら作っていき、ようやく納得のいくパンが焼き上がりました。そのパンをミス・パウルに食べさせると、故郷の味に再会できた感動のあまり彼女の目には涙が浮かんでいました。

こうしてチェルシーバンズは現在でも多くの地元住民、旅人に愛され続けています。



大人気のためすかさずかの商品棚



このテーブルは小弥太さんが昔パンをこねていたテーブル  
(ミス・パウル記念館にある)

## 新生療養所と戦争

1937年に満州事変が勃発すると、日本国内ではキリスト教に対して抑圧をし、外国人に対しても厳しい目を向けていきます。そして遂にカナダ聖公会は撤退を決定します。イギリスから輸入されたベッドや各国から寄せられた当時の最先端医療機器(レントゲンなど)、ドアノブまでもが戦時中の金属回収令によって接收されてしまいます。そして礼拝も禁止され、チャペルの上の十字架も撤去を迫られてしまいます。そして開戦の詔勅を1字読み間違えた牧師が1ヶ月間の謹慎、韓国人医師が言語不当といわれ解雇を迫られるなど暗い時代が幕開けました。そして1941年に日米開戦。療養所は伊藤加奈太博士を所長として再出発しますが1年で経営を断念してしまいます。そして糟谷伊佐久医師(岩崎しのぶさんの父)が所長に就任します。しかしその計画も短期間で御破算してしまいます。そんなとき長野県が療養所を接收するという意向を表明しましたが、接收されてしまうと療養所は消滅してしまいます。そこで佐々木鎮次中部教区主教は移管に際しては所長は宗教的理解のある者という条件をつきつけました。その条件もあってか長野県は条件を満たすことができないと判断し、かろうじて療養所の存続が保たれました。しかしこれで安全というわけではなく、栄養の補

給がままならず療養所の若者たちは次々と命を落としてしまいます。そしてその状況を見かねた医師たちが入所してきます。1945年別館を開館して軍隊の結核患者を収容した頃には長い戦争が終ろうとしていました。



戦争で外国人が消えてしまったスタッフの記念写真

## 新生療養所の戦後の歩み

1947年の6月のある日に小布施駅から療養所に異人さんが来たという一報が入りました。その異人とはミス・パウル、パウルス主教、ミス・フォステルでした。連絡を聞いた療養所の職員たちは彼らと抱き合って再会の喜びを分かち合いました。その前から予告なしにバターやミルク、コーンビーフなどの食料を軍を通して療養所に送っていたそうです。しかし看護師は帰郷、または他の病院へ行ってしまい、残った職員たちは最低限の食費をある家から支給されていたようです。さらに療養所の庭は自給のため畑になるなど戦争の傷跡が残っていましたが、職員たちは希望に満ちあふれていました。その頃闇市でしか手に入らないといわれた特効薬のストレプトマイシンをカナダから無償で入手して使用したそうです。その効果は絶大で療養所で患者を外に出すという作業がなくなったそうです。それから結核時代が終焉して療養所は新築され、町の病院、新生病院となり現在に至ります。





**現在の新生病院**

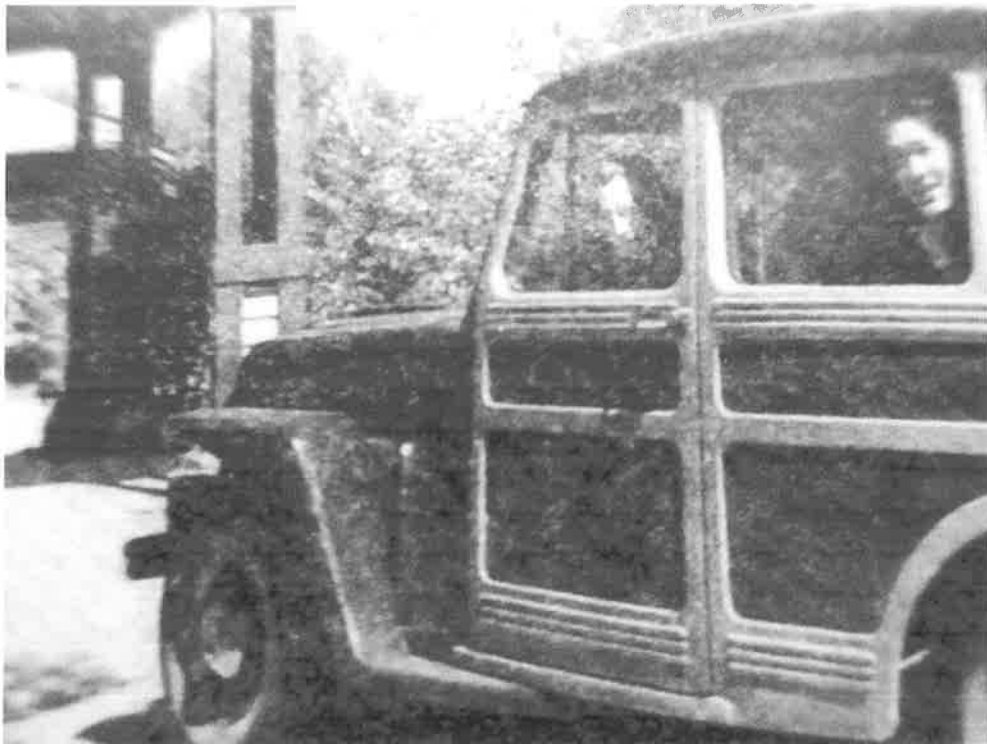


**カナダのシンボルのメイプルの葉が刻印されています**

## スタート博士について



R・K・スタート博士(1900～1977)は新生療養所初代所長を務めた医学博士です。カナダクイーンズ大学卒業後オンタリオ州の療養所で結核と胸部疾患を専攻した後要請があり、カナダ聖公会派遣医療宣教師として来日。スタート博士は着任当初からユーモアと誠実な性格が職員からも患者からも敬愛されていたそうです。そのためどんな小さい子供でもひとりの患者として丁寧に治療、診察していたそうです。そんなスタート博士は1936年に新生療養所でスタッフとして働いていたカスリーン・ブッチャー(のちのスタート夫人)と結婚しました。しかし、その後戦争により帰国を余儀なくされても出発直前まで手術を執刀して、日頃貯めてきた現金を療養所に残して帰国します。そして、戦後の復興が完了したときカナダで購入したジープに結核の特効薬「ストマイ」をはじめ、毛布備品などの物資を詰め込み横浜から小布施に愛息子ブライアンを連れて帰任しました。そして結核時代が終焉した後帰国します。1997年に日本に招待されました。しかし来日直後、心臓発作で倒れてしまいます。患者達に慕われた人生でした。



**カナダで購入したジープに物資を詰め込んで小布施に  
帰任したスタート博士**



**帰任後の記念写真**



死後に建設されたスタート博士記念館（新生病院の敷地内にあり集会所として使用されている）





## ミス・パウルについてお話を聞く



ミス・パウル（1901～1992）はカナダ聖公会派遣医療宣教師として1934年に新生療養所に勤務、翌年先代の長がスタート博士と結婚しカナダに帰国したため看護師長に就任します。元々ミス・パウルは厳格で特に清掃についてはとても厳しく、素足で子供が歩いたり、寝転んでいると「廊下には結核菌があるから」と言って強く注意をしていたそうです。また、自主的な掃除は欠かさず彼女の掃除は床、壁、天井と隅々まで行っていたそうです。そのように規則に厳しいミス・パウルを良く思わない患者もいましたが、実際に病気を克服して日常生活に戻ってみるとミス・パウルの看護の適切さを実感するとともにカナダ聖公会の人々の偉大さを痛感するそうです。さらにミス・パウルは「看護師は医師の従属的立場ではない」と看護師の独自性を主張しました。そして何より女性の人権確立もキリスト教の信仰を通じて訴えたそうです。そのため日本中から看護師の研修や見学が相次いだそうです。そして戦争を理由に一時帰国したものの戦後も日本に招待されたそうです。

そして日本で65歳で定年を迎え、カナダに帰国。最後まで白衣の



尊さと奉仕の精神を謳い続け日本の看護の発展に尽くし、カナダでひっそりと息を引き取りました。

ミス・パウルが宿舎として過ごした家が病院の敷地内にあり、ミス・パウル記念館となっているので病院と礼拝堂、記念館を案内してもらいました



左はミス・パウル記念館にて  
(左は岩崎しのぶさん、右は  
新生病院礼拝堂の牧師の金善  
姫さん)



戦前からある病院の礼拝堂





ミス・パウル記念館



# チェルシーバンズを作ってみる

チェルシーバンズは18世紀のイギリスはロンドンのチェルシーの「Bun House」という店で作られていたパンです。ハノーバー朝(1714~1901)の貴族たちが気に入っていたパンです。カナダにはイギリスからの伝えられたものと思われる。

今回は家にパン焼き器がないのでネットを参考にして簡単なものになっています。(小布施岩崎のレシピは企業秘密だそうです。)

まずはベーキングパウダーと薄力粉をふるう



レーズンを沸騰した湯で1, 2分茹でる





オープン皿に薄くバターを塗り、強力粉をふるった底にクッキングシートを敷く



ふるった薄力粉とベーキングパウダーと砂糖をボールに入れて、バターを加えて、バターをこすりながらバターを溶かす



ボールに牛乳と卵を加えて、ゴムベラで切るように混ぜる





強力粉を付けていたまな板に生地をのせていき 15 cm×35 cmほどの長方形にのばす



生地に薄く手でバターを塗り、まんべんなくブラウンシュガーとシナモンとレーズンをかける



**生地を隙間がないようにくるくると巻く**



**9等分に切って、形を整える**



**オープン皿に並べる**



クルミを添えて、あらかじめ予熱しておいたオーブンに入れて17分待つ



焼き上がり





仕上げに水と砂糖を入れた小鍋を火にかけて、沸騰させないように砂糖を溶かして煮詰める



そして刷毛で塗る



完成!!





味や食感は本家とは程遠いものになってしまいましたがそれはそれで美味しいものでした。

今回は簡単な作り方でしたが本来のチェルシーバンズを作るには多大なる努力が必要だと感じました。

本来のレシピは企業秘密という事で、ネットを参考にして作りました。

<http://recipe.rakuten.co.jp/recipe/1070004755/>より



小布施岩崎のチェルシーバンズ  
(冷凍保存していたので形が悪い  
ですが、本当はもっときれいな形を  
しています)



今回作ったチェルシーバンズ

## 終わりに

僕はこの研究をして思ったことは現在こそ簡単に治療ができる結核ですが戦前から多くの若者が病気にかかり死んでしまっていたことに驚きを感じました。またカナダ聖公会が当時の日本の結核患者を救うために募金を募ってくれたという事を本で知り、感動しました。

また岩崎小弥太さんは戦後まだパン食が根付いていない時代に新しい味を求めようと、チェルシーバンズ作りに没頭したという事を考えると相当な苦労があったと感じました。

チェルシーバンズ作りは本来とは違いましたがとてもやりがいがあった楽しかったです。

今回の研究でお話を聞かせてもらった岩崎しのぶさん、金善姫さん、本当にありがとうございました。

この研究をまた来年の研究に活かしていきたいと思いました。

# 参考文献

世界一のパン ～チェルシーパンズ物語～

絵と文 市居みか ルポ 中島敏子 英訳 ハート・ララビー

サンクチュアリ出版

語り継ぎ受け継ぐ新生 小布施新生病院八十年の歩み

「小布施新生病院八十年の歩み」歴史編集委員会



2年2組29番 西田 圭汰君

自由研究係  
中学教務主任

## 自由研究の作品について

今年度、あなたの自由研究作品「世界一のパンと結核療養所」（日本史）は、「銅賞」と評価されました。おめでとうございます。

ついでには、あなたの作品をしばらくお預かりして、この11月と来年6月の桐朋祭にて行われる「自由研究展示会」で、展示させてもらいたいと思います。

それに伴って、作品の返却が2017年度桐朋祭終了後になります。長期間お預かりすることになりますが、了承してください。それではよろしく申し上げます。

※ 何か不明な点などがありましたら、担当教員の栗原忍まで聞きにきてください。